78 明治10年1月21日　菊池長閑宛

第一号　明治十年一月廿一日　（長閑注記1）

（長閑注記2）

年頭御祝詞愛度申収奉る第十一号鳳翰去月達し拝見之所不図も御叔父様の御病死驚入たる新報如何計か御愁傷の事と遥察す私に於ても実に痛心之至なり宅命君未タ修業盛り（役人とハ雖モ）殊に役柄同所に落着人にも無之自ら尊前の顧慮を可煩彼家族に御添心ノ儀ハ私よりも願奉る御叔父公の尊意もあれば後日宅命君と協力両家愈和合繁栄する様私共両人にて務可申修業盛り立身盛りの者ハ可成丈家事細目に（ママ）（抹消）〔掛懸らぬ方極て後来の繁栄に益ありの〕〔寧ろ〕三歳の小児に一合の米を荷はせんより寧ろ其長するを待一駄の米を為負に不苦素より二十一歳以上の者一家を治るの力不可無将タ常に有なれ共二の者の何れを取んと云ヒハ後益の大なる方を取へし当地四十歳位の者を指て若い者と云ふ五六十歳の者を人間の盛りと云ふ高位重職に就者大抵皆五拾以上欧米各国の有名家ハ孰も六七十以上なり私の学校にハ八十余の先生あり其講説分明実に美事なり総て諸人の信任を受ハ六十歳前後に在なり又当地にてハ人々其力に食故六十五六歳七十位迄ハ力を

労し或ハ心を労し弱々として職業を励み敢て子孫の膏血に食まぬハ誠に通常の事なり〔抹消〕生レなから骨格の丈夫なるとハ云ふものゝ敢為の精神不屈の気性なくハ如斯にハ参まし此段に至てハ毛唐人に閉口なり過る一日にハ同国人十一名寄合元旦の祝を為セリ去歳より殊の外の大雪にて市中繁雑の顔と雖ヒ地を不見事一月余なり

御尊父様　　武夫拝

（長閑注記1）
「三月十四日達し
四月十五日第四号ヲ以テ返書出シ」
（長閑注記2）
「日数五十三日」